

質疑応答一覧

Q1	今回の取組みに対する郡山市長の意気込みをお聞かせください。
A1	郡山市の小児医療体制再編は、子育て世代が「子どもを産み育てやすい」と感じる持続可能な体制構築を目指すものであり、小児救急体制の確立により、子育て世代に選ばれる魅力的な都市となるための非常に意義深い取り組みであると思います。
Q2	集約化を引き受ける意気込みを、太田総合病院の太田理事長よりお聞かせください。
A2	太田総合病院は、明治28年の創業以来の「地域住民に医療機会を提供する」という原点に立ち返り、少子高齢化や人口減少により地域での医療アクセスが困難になった現代において、将来の持続可能性に懸念が生じている小児医療の課題に対し、経営的・地域インフラ的な観点から持続可能な形でその中核を担うべく、郡山市、郡山医師会、および地域の他の医療機関と密に連携しながら、その重要な役割を果たしていく所存です。
Q3	小児初期救急医療とは、どのような患者を対象とするのですか。
A3	患者の症状の重さや緊急性により、救急には3つの区分があり、このうち初期救急の患者を受け入れます。 初期救急:医師の診察後、処置や薬の処方を受けて帰宅できる軽症者が対象 2次救急:診察後、入院が必要となる中等度以上の患者が対象 3次救急:生命に関わるような重篤な状態の重症患者が対象
Q4	市内の小児科医は、以前と比べてどれ位減っているのでしょうか。
A4	2006年には、急病センターの当番に入ったり休日当番医を務めていただく診療所が18か所ありましたが、2026年3月時点では、13か所に減少しています。 現在の休日当番医を務める医師の平均年齢は63歳で、70歳以上が3名、最高齢は71歳です。
Q5	小児科医の皆さんが負担となっている具体例を教えてくださいませんか。
A5	休日当番医では、冬場は1日100人から200人もの患者を診察することがあり、高齢の医師にとっては、体力的に非常に厳しい状況です。 小児科医の減少により、急病センターの当番や休日当番医の当番の回数が多く、体力的に負担になっていると共に、高齢の医師が多いことから、体調不良による医師交代が頻繁に発生し、その穴埋めをするなどのため、当番回数が多い医師に負担の偏りが出ています。

Q6	<p>太田西ノ内病院の小児初期救急外来を受診した患者が、入院を必要とするケースがあると思います。入院を必要とする際には、当番に当たっている2次救急病院が受け入れることになるのですが、保護者としては、そのまま太田西ノ内病院に入院させて欲しいと希望されると思うのですが。</p>
A6	<p>2次救急を務める病院は輪番制になっており、太田西ノ内病院は、週の半分程度は小児科の2次救急を担当しております。したがって、2次救急の当番日には、そのまま入院できる可能性が高いと見込まれますが、当番でない日や、当院に救急車による患者や2次救急、3次救急の患者が多く搬送された際には、他の病院（星総合病院、寿泉堂総合病院、総合南東北病院）を紹介したり搬送となる可能性があります。</p> <p>これは現場の運用上避けられない実態であり、保護者の皆様にはご不便をおかけすることもあるかと思いますが、ケースバイケースで、患者や保護者の理解を得ながら丁寧に対応していく方針です。</p>
Q7	<p>来年4月から、休日・夜間急病センターの小児科が無くなるということですね。</p>
A7	<p>2030年までは、休止という形をとります。休止とすることにより、新型コロナウイルス感染症のような新興感染症がまん延した際に、太田西ノ内病院だけでは抱えきれない場合に、急病センターの小児科をいつでも開設できるようにしておきます。</p>